

# ムーブメント教育・療法による障害幼児の発達支援

MEPA-R・MEPA-II R の評価を参考に

〇是枝喜代治

（東洋大学ライフデザイン学部）

KEY WORDS: 障害幼児, アセスメント, 発達支援

## 1. 目的

近年、就学前の身体障害、知的障害等のある子どもに対し、個々人の障害の特性やニーズに応じた支援を適切に行うことや、ライフステージに合わせた切れ目のない支援体制を構築していくことが強く求められている。本研究では、地域療育の中核的な役割を担う児童福祉施設として位置づく児童発達支援センターに通園する障害幼児に対し、運動を媒介とした発達支援の方法の一つとして位置づくムーブメント教育・療法を用いた継続的なグループ指導を展開し、個々人の発達の経過を探ることを目的とした。

## 2. 方法

### 1) 対象者、指導期間、手続き等

対象者は、関東圏の A 児童発達支援センターに通園する児童 3 名である。2 名は ASD (B 児, C 児) の診断があり、他の 1 名 (D 児) は肢体不自由があり、支援者が手を添える形での介助歩行が可能である。指導期間は 202X 年 8 月～202X 年 12 月までの 5 ヶ月間で、各児童の担当保育士と共同で指導に当たった。指導前と指導後に、MEPA-R 及び MEPA-II R の評価を実施し、指導後に担当保育士の聞き取りを基に、個々人の臨床的な発達の経過を探った。

### 2) アセスメントについて

指標としたアセスメントは、ムーブメント教育・療法を展開する上で用いられる MEPA-R と MEPA-II R で、担当保育士と共同で評価した。同様に、担当保育士及び園長同席のもと、個々人の変化について情報の共有を行った。

### 3) 指導（療育）内容について

本研究では、事前に担当保育士と共同でプログラムを検討し、日常の集団療育の中で活用できるように工夫した。特に毎日午前中に行われる集団療育場面において、ムーブメント教育・療法に基づく、遊具等を活用した感覚運動支援（ユランコ（布製遊具）による揺れ刺激、キャスターボードを利用した加速度刺激等）や、社会性を育てるための支援（パラバルーンを用いた活動）、リボンを活用した腕の回旋運動などを、日常の療育の中に取り入れて展開した。

### 4) 倫理的配慮について

対象者 3 名の指導に関しては、各児童の保護者及び所属機関の園長、理事長の了解をそれぞれ得た上で実施した。なお、個人データの結果等に関して、本発表に使用することについても、各関係者から同意を得ている。

## 3. 結果及び考察

### 1) MEPA-R を指標とした B 児と C 児の発達経過について

B 児, C 児共に、MEPA-R の指導前の評価では、他者と共同で活動する項目や、言語や社会性の領域において、未通過の項目が見受けられた。両児に関しては、年齢に準ずる運動機能の育ちがある程度認められたため、集団での活動を通して、他者（友達や先生等）との関わりや、場面に適した言語理解を促すことなどを目標に取り組んだ。

B 児に関しては、指導後に言語の項目（Le-20：代名詞を使う（±））における芽生え反応が認められた（〇〇君の△△等）。また、社会性の項目においても、緩やかな発達

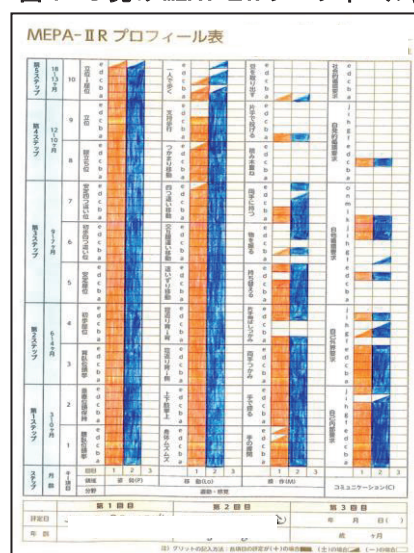
の経過が示された（S-13：人の手を引っ張ったりする（+）、S-15：まねをして遊んだりする（±））。C 児に関しては、姿勢の項目（P27：ぶらんこの立ち乗り（+））や、操作の項目（M-25：ボールを上手から投げる（+））において顕著な発達の経過が示された。同様に、社会性の項目においても、緩やかな発達の経過が示された（S-26：禁止されていることをやった子どもに注意する（±））。

B 児と C 児は年齢も異なり、全体的な発達にも若干の相違が認められる。指導後の保育士の聞き取りからは、C 児の発達がより助長されたのは、C 児の年長になるまでの経験（幼稚園での経験）が、要因の一つと考えられた。当センターは、保育園等との併行通園は実施していないが、個々人の状況やニーズに応じて、健常児との交流や併行通園を柔軟に実施できるシステムの検討も必要と考えられた。

### 2) MEPA-II R を指標とした D 児の発達経過について

D 児は、介助歩行が可能なおことから、物に掴まって自力移動ができることを主たる目標として取り組んだ。センターの作業療法士（OT）にも協力を仰ぎ、本人に負担の無い形で、四肢の体幹を維持できる活動を展開した（キャスターボードに乗り、ゆっくり進む等）。MEPA-II R の指導後の評価からは、特に移動系の項目（Lo9：片手の支持で歩く（+））と操作系の項目（M-1：手で握ったり、開いたりする（+））で顕著な発達の経過が示された。同様にコミュニケーションの領域でも、緩やかな発達の経過が示された（C-2：自分の名前を呼ばれた時に反応する（+））。図 1 には、D 児の MEPA-II R のプロフィール表を示した。

図 1 D 児の MEPA-II R プロフィール表



指導後の担当保育士からの聞き取りからは、継続的な指導を展開することで、5 ヶ月間という限られた期間であったが、子どもの成長を視覚的に把握することができたという意見や、肢体不自由の子どもであっても、ゆっくりと見守っていくことが必要だと改めて感じたなどの意見があった。他方、筋ジストロフィーなどの退行性の子どもたちに対するアセスメントをどのような位置づけにするかなどが課題として考えられた。

(KOREEDA Kiyoji)